



FUKUOKA ONE HEALTH
Human Health, Animal Health, Environmental Health

Dog Therapy

ドッグセラピー導入のための
ガイドブック



 福岡県
Fukuoka Prefecture



// はじめに //

福岡県では、人と動物の健康と環境の健全性を一つと捉え、一体的に守っていく「ワンヘルス」の取組を進めています。

ワンヘルスの取組の一環として、障がい児施設等にセラピー犬を派遣して、障がいのある人の身体的、精神的健康の増進を図るモデル事業を令和4年度から実施しました。

この事業では、児童発達支援センターや特別支援学校に受入れの御協力をいただき、より効果的なものとするため、専門家チームをはじめ、関係者の方々の御意見を基に、ドッグセラピーの実践を積み重ねてきました。

本ガイドブックは、ドッグセラピーの取組内容や効果を多くの方に知っていただくとともに、導入を考えている施設の皆様が円滑に実施することができるよう、事例や手順、配慮事項などを取りまとめたものです。

このガイドブックが活用され、ドッグセラピーの取組を始め、ワンヘルスの理念の更なる普及につながることを願っています。

// 目次 //

# 1	ワンヘルスとアニマルセラピー	1 - 4
	ワンヘルスや福岡モデルのドッグセラピーの概要を解説しています。	
# 2	ドッグセラピー プログラムのデザイン	5 - 8
	福岡モデルのドッグセラピーにおいて受入側と派遣側が共同して創出するプログラムの基本項目を紹介しています。	
# 3	ドッグセラピーと安全性	9 - 12
	安全に犬とふれあうためのチェックポイントや、アレルギーへの対応、ドッグセラピーの具体的なメニューを紹介しています。	
# 4	施設訪問モデル	13 - 16
	児童発達支援センターへの訪問モデルの実践レポートです。導入のヒントがたくさん掲載されています。	
# 5	特別支援学校・訪問モデル	17 - 20
	福岡聴覚特別支援学校幼稚部、久留米聴覚特別支援学校幼稚部、福岡視覚特別支援学校小学部で実施した学校への訪問モデルの実践レポートです。	
# 6	野外モデル	21 - 24
	野外モデルで行うときのコーディネートのポイントや、継続実施した個別事例で見られた行動の変化についてレポートしています。	
# 7	ドッグセラピーと多様な人々の関わり	25 - 28
	本事業に参加した様々な立場の皆さんからのメッセージです。 (医師、獣医師、臨床心理士、保育士、作業療法士、言語聴覚士、ハンドラー、コーディネーター)	

ワンヘルス(One Health)とは、「人の健康」「動物の健康」「環境の健全性」を一つの健康と捉え、一体的に守っていくという考え方です。

福岡県では、令和4年度から、ワンヘルスの取組として、セラピー犬を障がい児施設等に派遣する事業をモデル的に実施しました。

アニマルセラピーは、動物の持つ能力や性質を活かして、人々のQOL(Quality of life)の向上につなげるアプローチです。様々な動物の介在が知られていますが、今回は様々な場所を訪問して活動できる強みを活かそうとドッグセラピーに着目しました。この活動は、ワンヘルスの6つの柱のうち、「人と動物の共生社会づくり」「健康づくり」「環境と人と動物のより良い関係づくり」と密接に関連しており、動物たちと安心してふれあうことを通じて「人獣共通感染症」の対策の大切さを改めて考えたり、環境保全との繋がりを意識するきっかけにすることができます。

普段の生活の中でワンヘルスを意識する入り口はたくさんあります。アニマルセラピーもそうした入り口の一つです。

ワンヘルスにつながる
6つの柱



福岡モデルの3つのC

今回の福岡モデルでは、様々な立場の人々が目標に向かって相互理解し問題解決に取り組むアプローチが重要と考え、3つのC (Collaboration)、(Communication)、(Coordination)を重視することとしました。これにより、行政、医療、教育、福祉と連携して取り組むセラピー犬派遣事業の実施に結びつきました。

Collaboration	Communication	Coordination
安全で訓練されたセラピー犬を派遣することができる団体とコラボレーションする。	受け入れ側の施設やスタッフと十分なコミュニケーションをとり、事前の準備、事後の振り返りを行う。	医療療育の専門家がチームになって、計画、実施、評価に関与し、関係者間をコーディネートする。

アニマルセラピーについて

アニマルセラピーは、「動物を介して人々の健康や幸福を向上させるアプローチ」といえます。「セラピー」には「療法」といった意味がありますが、様々な分野で、目的や評価が曖昧な活動にも使用されることがあるので、最初に用語についての考え方を紹介します。

海外では、動物介在介入(AAI)という大きな枠組みがあり、そのタイプとして、医療分野で行われる動物介在療法(AAT)、教育分野で行われる動物介在教育(AAE)、福祉をはじめ広範な分野で行われる動物介在活動(AAA)があるとされています。(右表参照)

日本で一般的に使われているアニマルセラピーは、広い枠組みのAAIのいずれかに該当すると考えられます。3つのうち、セラピーの意味を最も含むのは、医療分野で行われるAATです。教育分野で行われるAAEは、命について学ぶワンヘルス教育との親和性が高く、展開が期待されます。AAAは、多くの人に参加できる工夫ができる分野といえます。福岡県のモデル事業は、こうした3つの分野の良い要素をうまく取り入れることを目指しました。

表 / 動物介在介入(AAI)のタイプ (引用 アニマルセラピーの現状と応用)

動物介在療法(AAT)	動物介在教育(AAE)	動物介在活動(AAA)
人の医療現場で、専門的な治療行為として行われる動物を介在させた補助療法。医療従事者の主導で実施。精神的・身体的機能、社会的機能の向上等、治療を受ける人に合わせた治療目標を設定、適切な動物とハンドラーを選択。治療後は治療効果の評価を行う。	小学校等に動物と共に訪問し、正しい動物とのふれあいかたや命の大切さを子どもたちに学んでもらうための活動。	動物とふれあうことによる情緒的な安定、レクリエーション、生活の質の向上等を主な目的としたふれあい活動。国内の多くの活動はこれに属する。

(「アニマルセラピーの現状と応用」(吉田2015)を参考に作成)



ドッグセラピーについて

アニマルセラピーは、人々の心身の健康増進や社会性を高め、ウェルビーイング（健康と幸福）に寄与するもので、そのうち犬の特性を活かして行われるものがドッグセラピーです。

人々と犬たちが安全に関わるためには、犬の行動を管理できるハンドラー（トレーナー、訓練士など団体によって名称が異なる場合があります。）の存在が重要です。犬とハンドラーの強い信頼関係がドッグセラピー全体をより安全なものにしています。

こんにちは！



車から降りてくるハッピー

ドッグセラピーはさまざまな効果をもたらしますが、個々のケースによって効果が異なることや、すべての人にとって適切なアプローチになるとは限らないことを知っておくことが重要です。参加者の心身の状況に気を配るのはもちろん、セラピーを行う犬についても表情や行動を常に観察し、ストレスサインが現れた場合はセッションを中断する等、柔軟性も必要です。

セラピー犬としての活動に適している犬

穏やかな性質、人への親和性、 社交的な性格、環境への適応力

セラピー活動を行う犬たちには訓練が必要です。育成基準や方法は各団体によって規定されており、基本的な訓練や、様々な場面で人とのコミュニケーションに円滑に参加できる力を育むなどの育成プログラムを受け、予期せぬ状況にも穏やかに対応できる能力を養います。セラピー犬になれるのは特定の犬種というわけではありません。保護犬から、適した特性が見出され、セラピー犬として育成されることもあります。

ドッグセラピーの導入を検討する場合には、セラピー犬の派遣を行っている団体等に、育成方法、犬たちの健康面、衛生面への対応方法などを問い合わせてみると良いでしょう。



マスコットキャラクター
ワンヘルスぽうや

活躍中の
セラピー犬たち



動物福祉※の視点

※ 動物福祉（アニマル・ウェルフェア）とは…
動物たちが心身ともに健康で、自由な行動を取ることができる環境を提供する概念です。

- 過度な負荷や長時間の活動は避け、犬の休息時間を確保する。
- 無理な訓練や不自然な活動を強要せず、犬の気持ちやサインを尊重する。
- 定期的な健康チェックや予防接種を受けさせ、健康に留意する。
- 衛生管理を行い清潔な環境を提供する。
- 犬が安心できる環境を作り、ストレスを最小限に抑える。

ハンドラーと犬との信頼関係

ハンドラーは、犬たちの日常的な世話をはじめ、運動や遊び、愛情表現を通じて犬との信頼関係を築いています。セラピーを提供する際には、事故が起きないように犬たちの行動を管理しながら、円滑なコミュニケーションをとります。また、参加者が気づかないような犬からのサインなどを読み取って、参加者に伝える役割も持っています。



セラピー犬との効果的な関わり方

ハンドラーはセラピー犬と穏やかな声と態度で接しています。「来い」より「おいで」、「座れ」より「座って」etc.こうした声掛けや接し方は、犬とふれあう経験が少ない参加者にとって、とても良いモデルとなります。犬たちへの挨拶や犬が喜ぶこと、犬が嫌がることなども、派遣団体やハンドラーからレクチャーを受ける等の方法により、受け入れ側スタッフが十分理解し、参加者に伝えるという手順を踏むことで、活動がより安全で効果的なものになります。

ハンドラーとセラピーの受け入れ側との役割分担

ハンドラーには、事故やケガが起きないように細心の注意を払ってセラピー犬の行動を管理するという役割があるため、参加者の動きや反応については、日々関与している支援スタッフが目を配る等の役割分担をするとスムーズで効果的な活動となります。

打ち合わせ内容の例

- 進行の仕方、犬や参加者の動線など
- 活動に参加する動機や期待
- 参加者の特性やニーズ（犬への不安がないか、突発的な行動など）
- リスク発生時の対処方法・感染症対策や必要な薬の準備
- 犬たちの動線（登場や退場の仕方など）
- アレルギー、医療的ケアに関する情報
- 参加者の動線（セラピーを行う部屋の選定、椅子の配置など）

ドッグセラピー実施場所（屋内と野外）

屋内

犬が参加者の「馴染みの場所」に会いに来る
（園や学校のプレイルームなど）
犬も参加者も特定の会場に向かう
（実施のために借りた施設の部屋など）

野外

犬も参加者も森や広場に向かう
（ワンヘルスの森四王寺など）



マスコットキャラクター
ぽなちゃん

ハンドラーとの実施場所に関する事前打合せ

- 温度、騒音、明るさ、広さなど活動の妨げになるような環境要因がないか確認し、受入側は、施設の規則等に即しながら、できるだけ快適な環境になるよう調整
- 駐車場から子どもに会うまでの動線や、犬の排泄が許容されるルールの確認
- 野外で行うときは雨天時の対応



ハンドラーさんに聞いてみた

（取材協力 認定NPO法人 日本レスキュー協会）



Q ドッグセラピーは犬たちに
ストレスをかけすぎたりしませんか？

セラピー活動に適しているかについて、生後8ヶ月以降に「潜在性・適性テスト」を実施します。実際の現場でストレスなく活動できるかどうか、約15項目の内容をチェックし、適性があると判断した犬のみを育成することで、犬も楽しみながら活動できるようにしています。他にも、人とのふ



れあいの後は、犬自身が体を動かすプログラム（フープジャンプやキャッチボール）を組み入れるなど犬も楽しめるようプログラムの構成を工夫しています。

Q セラピー犬の活動年数は？

引退の年齢は明確には決まっていますが、年齢と共に体にも変化が出てきますので、個々の状態を見ながら調整しています。例えば、無理にフープジャンプをさせない、など。過去には8歳で引退した犬もいれば、10歳まで活動した犬もいます。

Q 引退後はどうしているのですか？

これまで人のために活動してくれた犬たちですので引退後は家族として可愛がってくださる方を探します。

譲渡先への細かな条件はありますが、残りの年月を幸せに過ごしてほしいという想いとこれまでの恩返し気持ちを込めて、愛情いっぱい可愛がってくださる家族を探すところまで、ハンドラーのお仕事だと思っています。

福岡モデル 「ワンちゃんたちがやってくる」

プログラムの目的

- ① 子どもたちの心と体の発達に寄与する。
- ② 自分を大切にすることと同様に周りも大切にしようとする意識を醸成する。
- ③ 生物多様性を体感する。
- ④ 環境に関心を持ち、様々なつながりの中で生きていることを実感する。
- ⑤ 子どもを取り巻く周囲の大人に多角的な視点を与え、ゆとりある子育てを支える。



活動に関わる大人たちも、ドッグセラピーを通じて成立する「犬と子ども」の関係性から、多くの学びを得ることができます。

期待される効果

安心感

Sense of Security

犬の愛情と忠誠心は、人々に対して安心感を提供します。さわられることや、共に運動したり遊んだりすることを好む犬たちと過ごすことでストレスの軽減やリラックスにつながります。安心感は、癒されているという感覚を得るベースになるものです。癒しとは、心身の傷や痛みを和らげ、健康や幸福感を回復させるプロセスを指します。

関係性の構築

communication

人との交流を得意とする犬は、言葉を介さなくてもコミュニケーションをとることができます。対人コミュニケーションが苦手な方でも、犬との関わりを通じて、意思や気持ちを伝え合う力が高まる場合があります。

内なる力を引き出す

empowerment

犬との散歩は、運動不足解消や健康増進につながるだけでなく、一緒に歩くことそのものが気分を高揚させてくれます。キャッチボールなどの遊びを通じて、体の動きが改善することも知られています。犬との関わりによって、新たに内なる力が引き出されることもあります。

様々な活動への意欲の向上

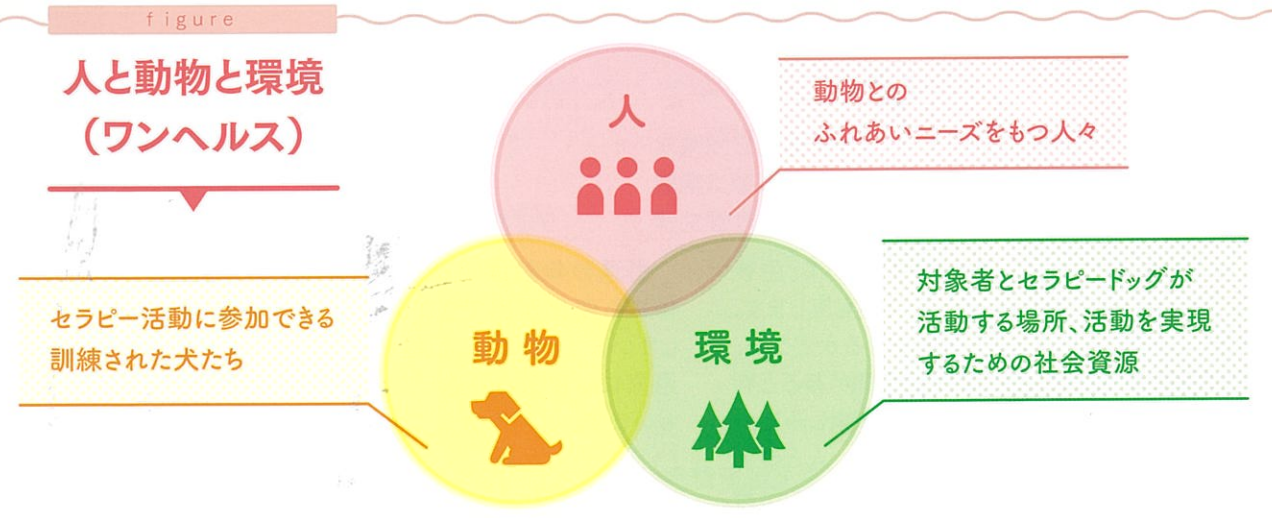
motivation

犬は人間の感情に敏感であり、愛情や喜び、悲しみなどに応じた犬の反応が、人々の感情表出を促すことがあります。またそれによって共感性が生じたり、関係性が深まることもあります。犬たちの動きや反応から、次はこうしよう、もっとやってみようというモチベーションにつながる可能性があります。

気晴らし

distraction

気晴らしは、治療に取り組む子どもたちの痛みや不安を和らげる効果として知られています。犬が来ること、犬と会えることの楽しみが、人々の力になることがあります。



ドッグセラピー実践の積み重ね・普及に向けて

ワンちゃんたちがやってくる!

ドッグセラピーのプログラムをデザインする際、大きな枠組みとなる項目について紹介します。本事業では、次のようなモデルを企画しました。

訪問モデル

参加者が通っている場所に犬が訪問(児童発達支援センター、特別支援学校など)

会場モデル

用意した場所に参加者も犬も集合(公共施設など)

野外モデル

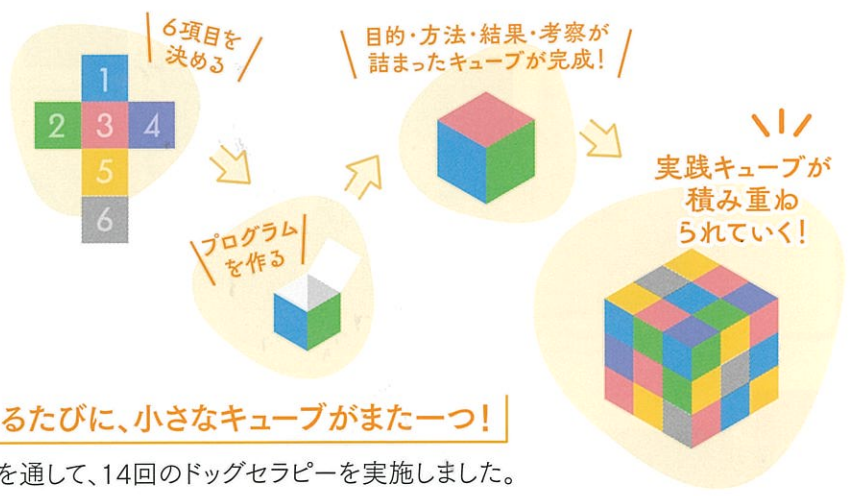
屋外に参加者も犬も集合(ワンヘルスの森四王寺など)

モデル事業のドッグセラピーでは、基本となる6項目により、プログラムを組み立てました。

基本の6項目

1 〈回数〉	2 〈場所〉	3 〈出会う方〉	4 〈対象〉	5 〈年齢〉	6 〈参加人数〉
初回/2回目以降	屋内/ 屋外	犬が参加者のいる場所を訪問/ 犬も参加者も特定の場所に集合など	発達障がい、視覚、聴覚、肢体など 身体の障がいなど	幼児、少年、成人、高齢者など	個別、ペア、少人数、集団など

プログラムは、6項目の組み合わせ次第で多様に創出することができます。1つのプログラムを作ることは、立方体=キューブの箱を組み立てるのに似ています。キューブの箱の各面に、6項目を当てはめて、プログラムの枠組みを作ります。それぞれのプログラムには、目的や方法があり、実際にやってみた結果から効果検証を行います。実践内容をキューブの箱に詰め込むと完成!というイメージです。



新しいプログラムが実行されるたびに、小さなキューブがまた一つ!
令和4年度、令和5年度を通して、14回のドッグセラピーを実施しました。

	令和4年度									令和5年度				
	No1	No2	No3	No4	No5	No6	No7	No8	No9	No 10	No 11	No 12	No 13	No 14
1 〈回数〉	初回	2回目	初回	2回目	初回	初回	初回	2回目	初回	初回	初回	初回	2回目	3回目
2 〈場所〉	屋内	屋内	屋内	屋内	屋外	屋外	屋外	屋外	屋外	屋内	屋内	屋内	屋内	屋外
3 〈出会う方〉	訪問(施設)	訪問(施設)	訪問(施設)	会場	野外	野外	野外	野外	野外	訪問(学校)	訪問(学校)	訪問(学校)	会場	野外
4 〈対象〉	発達	発達	発達	発達	発達	発達	発達	発達	発達	聴覚	聴覚	視覚	発達	発達
5 〈年齢〉	幼児	幼児	少年	少年	少年	少年	少年	少年	少年	幼児	幼児	少年	少年	少年
6 〈参加人数〉	集団	集団	集団	小人数	ペア	ペア	個別	個別	ペア	集団	集団	集団	ペア	個別
	25名	20名	12名	3名	2名	2名	1名	1名	2名	22名	16名	9名	2名	1名

引用 アニマルセラピーの現状と応用(吉田尚子)小児保健研究 第74巻 第3号, 2015(361~365)
 参考 ●「動物介在介入の定義とAAIに係る動物の福祉のガイドライン」(2018改定)IAHAIO「人と動物の関係に関する国際組織」International Association of Human-Animal Interaction Organizations)
 ●J A H A(公益社団法人 日本動物病院協会)「人と動物のふれあい活動(CAPP)(Companion Animal Partnership Program)」
 ●山崎恵子。(2022.11月)。動物介在プログラム基礎講習(2日間)。一社)優良家庭犬普及協会主催

1 <回数>

ドッグセラピーに参加するのが初めてか、2回目以降かはプログラム作成において重要な要素です。施設や学校などで行う初回のプログラムは、受け入れ側にとって、犬を迎え入れる初めての機会であり、子どもたちの反応や、犬の様子が未知の状態です。

また派遣側のハンドラーは犬の行動管理のプロですが、障がいのある子どもの特性やサポート方法について慣れていない場合もあります。このように初回は、それぞれ関係者にとって期待と不安が入り混じった緊張を生みやすい傾向があります。本事業では、専門職によるチームが、受け入れ側とハンドラーとの打ち合わせに参加し、初回を迎える準備に関わりました。

2回目以降は、目標の設定が具体的になっていきます。継続することで、各回の様子を比較することができます。

2 <場所>

屋内か屋外かという点は、活動のメニューを選択するのに重要な要素です。それぞれの場所に応じて犬と参加者との活動が安全に行えるか、リスクがないかを十分、検討する必要があります。場所の下見は、とても大切です。

下見と
打ち合わせの
ポイント

- ☑ セラピー犬がハンドラーと共に車で訪問する場合の駐車場及び会場までの動線
- ☑ 犬の排泄場所。ハンドラーが適切に処置することを伝え、施設付近で検討
- ☑ 天候が与える影響。温度や雨天の場合などの対策
- ☑ 犬が歩く地面や床の状況。活動しやすさの確認
- ☑ 犬の待機場所、会場への入退室の動線
- ☑ 犬の行動に影響を与えそうな刺激の有無

場所の下見は
成功のカギ!



3 <出会い方>

参加者と犬の「出会い方」には、参加者が「犬が来るのを待つ」場合と、「犬に会いに行く(出向く)」場合があります。「犬が参加者の活動拠点を訪れる訪問タイプ」では、参加者にとって、自分たちが日頃、活動している場所に犬を迎え入れることになり、「よく来たね」「ようこそ」などの歓迎の気持ちが生まれやすくなります。一方、「犬も参加者も、所定の場所に集まる集合タイプ」は、事前準備として「会いに行く行為」の前提となる「会いに行きたいという気持ち」につながるような働きかけの工夫も大切です。

子どもたちが
通っている園での
ドッグセラピー



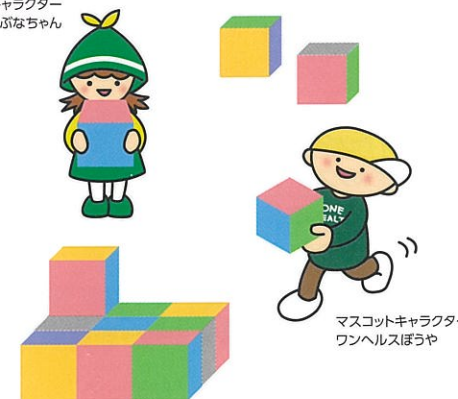
4 <対象>

本事業では、これまでに、発達、知的、聴覚、視覚などの障がいのある子どもを対象にドッグセラピーを実施しました。

それ以外の障がいについても「障がいの特性や配慮点」など、専門的な知識も含めて情報共有しながらプログラムを組み立てて実施することができます。

「動物とのふれあい」を求めるニーズは障がいの有無に関わらず、多くの人々が抱えています。人々のQOLの維持・向上につながるプログラムを創造することで、ドッグセラピーの対象はさらに広がります。

マスコットキャラクター
ぶなちゃん



5 <年齢>

年齢に応じてプログラムの進め方や着眼点は変わります。本事業では、子どもに対してドッグセラピーを実施してきましたが、幼児、少年、成人、高齢者など幅広い年齢の人々に実施することが可能です。

6 <参加人数>

参加人数によって、目標の立て方が変わります。個別プログラムは、比較的小さい子どものニーズを把握しやすく、子どものペースに合わせることができます。2名以上のプログラムにはペア、3名以上の少ない人数(小グループ)、大きめの集団などがあり、参加者同士の学び合いなどの影響や、体験を共有していく過程を観察することができます。大きめの集団で実施する場合、犬が対応できる人数、犬の負担を考慮に入れた人数規模に調整する必要があります。



人と動物との
共生社会づくりに
つながるヒントを
見つけよう!

ペア(室内・会場)



個別(野外)



「ワンちゃんたちがやってくる！」プログラム・レポート!

訪問モデル・初回のモデルケース(No1)

「はじめまして、ワンちゃん」

- プログラムの枠組み(6項目)
- 1 初回
 - 2 屋内
 - 3 犬が園を訪問
 - 4 発達
 - 5 3歳から5歳の幼児
 - 6 25名

目的 「ドッグセラピーを初めて導入するためのステップを知る」「犬とふれあう子どもの様子を観察し、ドッグセラピーの効果を考察する」

結果 初回の実施に向けた準備の手順や、受入側と派遣側の情報共有の重要性を確認することができました。実際にセラピー犬と子どもの交流によって子どもへの良い影響が確認され、次回のプログラムづくりへの多くの手がかりを得ることができました。

事前・事後の聞き取りより(一部抜粋)

受け入れ側スタッフ(保育士)

実施前は、どんな活動かイメージできていませんでしたが、子どもたちが楽しめるよう事前の準備を工夫しました。実物とのふれあいが子どもたちにとって特別な経験になることが分かりました。吠えたり噛んだりするリスクがほとんどないという説明をあらかじめ受けていたが、実際ハンドラーさんたちがしっかり対応してくれる様子を見て安心しました。次回のワンちゃんとの出会いに向けて、さらに準備をしていきたいです。

セラピー犬派遣側スタッフ

保育の先生方の準備が徹底していて安心しました。当日は、子どもたちの活気や盛り上がり犬たちにもいい影響を与えていました。ふれあいも穏やかに進行することができ、子どもたちの楽しそうな様子に喜びを感じました。専門家と協力することで、ドッグセラピーの活動が広がる可能性を感じました。福岡県でのワンヘルス推進に寄与していきたいです。

会場モデルの例(No4)

「あのね、ワンちゃんお話を聞いて」

- プログラムの枠組み(6項目)
- 1 2回目
 - 2 屋内
 - 3 犬も子どもたちも会場に集合
 - 4 発達
 - 5 中学生
 - 6 3名
- ※ 会場は、麻生リハビリテーション大学校のご協力で教室を貸していただきました。

目的 屋内で実施できるメニューの検討

メニューの1つに取り入れた「犬への読み聞かせ」は、音読に対するモチベーションや、音読スキルの向上という教育的効果が期待される活動です。セラピー犬への読み聞かせの経験がある子どもたち3人とご家族に再び集まってもらいました。

読んでいる途中で犬がよそ見をしていることに気づき、こちらを見るまで優しく待って、目が合った時に頷いてから、また読み始めるというシーンがありました。



結果 参加を決めた子どもたちは、犬に読み聞かせたい本を家族と探しに行ったり、年下の子に読んであげたことのある本を選んだりして、準備してくれました。当日の「読み聞かせ」活動では、子どもたちが犬のことを「聞き手」としてごく自然に接しているシーンがあり(写真)、最後まで読み終えて満足した様子でした。運動遊びや、ブラッシングなどの世話活動では、よりリラックスして笑顔が溢れ、最後はすっかり打ち解けて、犬も人もくつろいだ記念写真で終了となりました。



読み終わった後、ほっとしたような笑顔になり「ありがとう」と犬に声をかけていました。

犬が見やすいように絵本を犬の方に向けて、一音ずつ丁寧に読んでくれました。伝えようとする気持ちが溢れていました。



ドッグセラピーの効果を探る

今回の子どもたちの様子を見て特に印象的だったのは、子どもたちの犬との関わり方です。セラピー犬は、関わる相手に対して、「できる・できない」といった判断からではなく、一緒に何かすることそのものに興味を示し、喜びを表現してくれます。参加した子どもたちもまた、一緒にいることそのものを楽しんでいました。

見守っていた大人たちは、子どもたちの犬への接し方を見て、微笑んだり、感心したりしながら、子どもの力を見出していました。会場全体が穏やかで微笑みに包まれた空間となり、お互いを思いやる「場」を作ることが、人と動物の共生社会づくりにつながるという手応えを感じた活動となりました。

安全に犬とふれあうために

ドッグセラピー導入にあたって、**安全面**に配慮することが重要です。セラピー犬は、人と穏やかに楽しくふれあう事ができるように訓練されています。また、常にハンドラーがそばで犬の**行動管理**をするため、咬んだり、とびついたりすることは基本的にはありません。「セラピー犬は安全です」という説明を聞くだけでなく、事前に、受け入れスタッフとセラピー犬が交流する機会を設けることで、不安や心配がかなり軽減します。下見や打ち合わせは、こうした安全確認の場になります。本事業協力団体の認定NPO法人日本レスキュー協会は、日頃から、犬の**衛生管理**や**健康管理**について責任を持って取り組んでいます。受入側も派遣団体の取組について、話題にし、関係者間の相互理解を深め、**安全への意識**を共有することが大切です。

安全確保への取組

獣医師による
定期的な健康管理、
各種ワクチン接種など

健康管理
(運動、休養、睡眠、
食事、排泄など)

定期的なトリミング
(身体を清潔に保つ、
ケガや病気の予防)

衛生管理
(ブラッシング、爪切り、歯磨き、
耳掃除、毛のカット、シャンプーなど)

歯磨き
しようね



ブラッシング
するよ



耳掃除
しようね



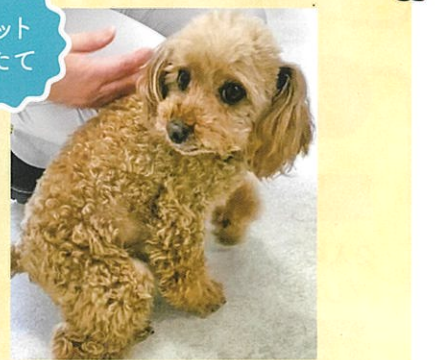
奥歯も
磨くよ



爪切ろうね



カット
したて



当日の衛生面、感染症予防・対策についての打ち合わせ(役割分担や物品の手配)

- ☑ 会場にプレイマットを敷くこと
- ☑ 衣服についた毛の除去(粘着テープクリーナー、ウェットティッシュなど)
※季節によって抜け毛が多い時期があります。犬種によっても毛のタイプが異なります。
- ☑ アルコールによる手指消毒
- ☑ 必要に応じたマスクの着用
- ☑ 会場使用前後の清掃・換気

ワンちゃんたちとできること(ドッグセラピーのメニュー) たくさんのふれあいの形

セラピー犬派遣事業ではたくさんの「ふれあい」が実現しました。プログラムの目的や条件に合わせて、メニューを選択し、順序も工夫しました。それぞれのメニューについてエピソードを交えて紹介します。

- 犬との出会いを楽しむ
- 犬とのコミュニケーションを楽しむ
- 犬の特技を活かして遊ぶ
- 犬が喜ぶこと(お世話)
- 犬といっしょに動いて楽しむ(運動)
- 犬との思い出を残す

犬との出会いを楽しむ

視覚特別支援学校では、子どもが犬にふれに行くという②が好評でした。

①名前を呼ぶ

犬の名前を覚えることは、出会いへの期待につながります。子どもが名前を呼んで犬が登場すると、会場の雰囲気は一気に明るくなります。



②子どもが犬の方へ行く

少し離れたマットなどで伏せて静かに待っている犬の方に子どもが行ってふれあう方法です。



③犬が子どもの方に来る

並んで座って待っている子どもの方に犬が歩いて近づいてふれあう方法です。



犬とのコミュニケーションを楽しむ

聴覚特別支援学校では、犬が大きく振る尻尾に、「風が吹いた」と喜んだ子どもや、犬たちが寝転んで呼吸するお腹の動きに、「息してる!」と先生に伝えていた子どもがいました。

④ふれあい体験

ハンドラーのガイドによって、犬に触り、大きさ、毛並み、温もりなどを体感したり、尻尾やお腹の動きを感じることで、子どもの犬への興味関心や親しみが増していきます。生きている本物の犬とのふれあいは、たくさんの発見をもたらします。



⑤絵本の読み聞かせ

犬は、子どものそばで寄り添い、穏やかに待つ事ができます。「絵本の読み聞かせ」は、犬のこうした特徴に着目した活動で、子どもの伝達意欲を育みます。



犬の特技を活かして遊ぶ

フープを跳んだり、ボールをキャッチしたりする犬の姿に、子どもたちは驚きの表情を浮かべ、すごいという眼差しを送っていました。ジャンケンでは、犬がプラカードを選ぶときに2枚くわえて、笑いが起きるシーンもありました。

⑥フープジャンプ

2人の子どもがフープを持ち、犬がジャンプします。子どもたちは間近で犬が飛ぶ様子を見て、犬の躍動感を感じることができます。



⑦キャッチボール

子どもが投げたボールを犬がキャッチし、その子のところまでボールを持ってきてくれます。



⑧ジャンケンゲーム

子どもたちに、グーチョキパーのどれかを出したままにもらって、犬が3枚のジャンケンプラカードから1枚くわえて戻ってくるというゲームです。



犬が喜ぶこと(お世話)

子どもたちは自分の働きかけで犬が喜んでくれると、とても嬉しそうでした。長い時間ゆっくりとブラッシングを続けていた子どももいました。水分補給をお手伝いした子どもは、ゴクゴクとおいしそうに水を飲む姿に優しい眼差しを向けていました。

⑨おやつをあげる

おやつあげは、犬も大好きな活動です。皿であげる、手で直接あげるなど、子どもに合わせて行うことができます。手で直接あげる時は、安全面への注意が必要になりますが、ハンドラーの適切な管理のもと、行うことができました。



⑩ブラッシング

子どもも犬もお互いに気持ちの良い穏やかな活動です。



⑪お水をあげる

子どもが、犬の水分補給のお手伝いをします。参加しやすい活動です。



犬といっしょに動いて楽しむ(運動)

⑫散歩

犬との散歩は、心理面、運動面、健康面などさまざまな側面からの効果が期待されます。ハンドラーと子どもが1本ずつリードを持って一緒に歩きます。歩調を合わせゆっくり歩くことで、心が落ち着き、犬への親しみが増し、共にいる楽しさを味わえる活動です。



⑬シャボン玉

屋外でも屋内でも、犬がシャボン玉を追いかける姿に、子どもたちは大喜びでした。シャボン玉だけでなく一緒に楽しめる遊びを見つけましょう。



⑭風船バレー

輪になって行う風船バレーでは、参加者とのパスが続くように、ボールの大きさや、動くスピードなどを工夫すると良いでしょう。犬はボールを追いかけて鼻で飛ばして楽しそうでした。大人にも入ってもらってみんなで楽しみました。



犬との思い出を残す

⑮記念写真

活動の最後に、子どもと犬が集まって記念写真を撮ります。セラピー犬たちは、子どもたちのそばで、伏せたり、座ったり、ポーズを取ったりして撮影に応じてくれます。その姿に、子どもたちの笑顔が溢れます。



アニマルセラピーにおけるアレルギーへの対応



Drからのアドバイス

アニマルセラピーの実施に際しては、アレルギー疾患に関する事前の打ち合わせが重要です。例えば学校を訪問する際は、アレルギー疾患をもつ生徒の対応に関する「学校でのアレルギー疾患に対する取り組みガイドライン」があり、主治医からの指示が記載された学校生活管理指導表があればそれをもとに対応を考えていくことになると思います。訪問先それぞれのガイドライン等を確認しておくとい良いでしょう。

動物との接触でおこるアレルギー疾患には、気管支喘息、アレルギー性鼻炎、アトピー性皮膚炎(接触性皮膚炎)、アレルギー性結膜炎があり、「吸入」と「接触」から発作が起きることが予想されます。

そこで、現時点で予定している活動内容を主治医の先生にご報告し、できるだけ、文書での指示をもらっておくと関係者で共有できて良いのではないかと考えます。

予防対策として

<p>接触を避ける工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 距離をとる ● マスク、エプロン、キャップ、フェイスシールド、手袋の使用 ● オンラインでつなぎ、別室で観覧 	<p>症状が出た場合に備える</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 自分用の薬を持参(吸入薬、目薬、塗り薬、内服薬) ● 医療機関からの指示書
--	---

主治医の先生に確認すること(質問の例)

- マスクを着用して同じ部屋にいることは可能ですか?
- 直接触れ合わず、子どもが投げたボールをワンちゃんが拾いに行くことは可能ですか?
- 直接触れ合わず、他の子どもがリードを持って散歩するときに、少し離れてついていくことは可能ですか?
- 手袋などを着用して犬の体に少しふれることは可能ですか?
- 症状が出た場合の対応について指示をお願いします。

活動での基本対策を再度確認

- セラピー犬と活動する場には消毒したプレイマットを敷く。
- 参加者の衣服についた毛の除去。
- 活動終了後のマット、床の清掃。
- 参加者の手あらい、うがい等。
- 参加者の口元を舐めさせない。

動物アレルギーで考えられる症状

① 接触に伴うもの	② 吸入に伴うもの
<p>アレルギー性結膜炎：眼のかゆみ、充血、流涙、結膜浮腫</p> <p>接触性皮膚炎：じんましん、発赤</p> <p>対応</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 手を洗う、顔(眼)を洗う ● 湿疹や発赤部位を冷やす ● 衣類についた動物の毛を取り去る <p>緊急性が高い症状</p> <p>全身症状</p> <p><input type="checkbox"/> ぐったり <input type="checkbox"/> 意識もうろう <input type="checkbox"/> 尿失禁、便失禁</p> <p><input type="checkbox"/> 脈拍が触れにくい <input type="checkbox"/> 顔や爪が青白い</p>	<p>アレルギー性鼻炎：くしゃみ、鼻水、鼻汁</p> <p>気管支喘息：咳、喘鳴、呼吸困難</p> <p>対応</p> <ul style="list-style-type: none"> ● うがい、楽な姿勢をとらせる(喘息の場合は上体を起こす) ● 喘鳴がある場合は動かさない(運動誘発性の喘鳴悪化あり) <p>吸入に伴う症状</p> <p>緊急性が高い症状</p> <p>呼吸器症状</p> <p><input type="checkbox"/> のどや胸が締め付けられる <input type="checkbox"/> 声がかすれる</p> <p><input type="checkbox"/> 犬が吠えるような咳 <input type="checkbox"/> 息がしにくい</p> <p><input type="checkbox"/> 持続する強い咳込み <input type="checkbox"/> ぜーぜーする呼吸</p>

もしも、1つでも症状が発生した場合… ●119番通報 ●(意識、呼吸が無い場合)心肺蘇生、AEDの使用

正しい知識を学んでシミュレーションをして備え安全な対応をしていきましょう

施設訪問モデル 児童発達支援センターでのドッグセラピー「ワンちゃんたちがやってくる」

事業概要 / セラピー犬施設派遣事業(令和4年6/28、7/26)

- 目的** 施設における効果的なセラピー手法の検討と、障がい児に対する好ましい影響の検証。
- 対象:3~5歳の発達障がい児30名
 - 内容:セラピー犬とのふれあい、キャッチボール、フープジャンプ等
 - 令和4年度協力施設 児童発達支援センター「しいのみ学園」
 - 専門家チーム 医師、言語聴覚士、作業療法士、保育士、心理士、獣医師

施設訪問プログラムの全体像

施設職員、セラピー犬派遣団体、専門家による事前協議(認識共有、実施内容検討) 施設における事前活動(写真パネルやZoomによる事前交流を通じ不安を軽減)

第1回 セラピー実施(約1時間)	第2回 セラピー実施(約1時間)
教室前の廊下でのふれあい ホールでの活動、振り返りミーティング(児童とともに第1回の経験を共有、次回への期待感を高める)	第1回の内容を踏まえメニューを追加 終了後に関係者インタビュー、振り返りミーティング

施設側の受入れステップ

- STEP 1 事前準備** 子どもたちの不安を軽減し、期待感を膨らませる働きかけ。日常の療育でも経験を共有。
- <セラピー犬派遣団体> セラピー犬のカードやぬり絵などの提供、Zoomを用いた事前交流
 - <受入施設> セラピー犬の写真パネルを園の廊下や教室に設置、日々の保育での声掛けや対話、カレンダーを用いて、セラピー犬の来園予定を子どもとともに確認・おたより帳による保護者とのやりとり等共同してプログラムを作る。
 - 犬アレルギーに関する情報確認。参加の仕方など対応策の検討。
 - 犬の行動管理はハンドラー。子どもへの直接的な働きかけは施設職員。
 - 施設職員の中にも犬が苦手な方がいる場合の事前打ち合わせ。

STEP 2 当日の実施 子ども心理的負担を軽減し、自然で自発的なふれあいへと繋げる

導 入：普段の教室から、廊下を歩くセラピー犬にふれあう

始まりの挨拶：ホールで半円形に椅子を配置(活動に集中できる着席の姿勢・環境) 施設職員が子どもたちに活動を伝える。みんなで犬の名前を呼んで犬たちが一頭ずつ登場

ふれあい活動：子どもたちが犬の体に直接ふれる(温もり、ふわふわ、脚、しっぽなど)

体を動かす活動：フープジャンプやキャッチボール

記念撮影：子どもたちが着座して並んでいる前に犬たちが並び、ポーズをとる

終わりの挨拶：子どもたちが別れを告げ、犬たちが退室

プレイルーム 椅子の配置

- STEP 3 事後の振り返り**
- セラピー実施後も、日常の療育の中で声掛けを行い経験を共有。次がある場合は次回の予告。当日の様子を振り返り、スタッフ・関係者で情報共有。

- スタッフのコメント**
- 園児の気持ちがいかに前に出てくることに驚いた。
 - 共感を味わいにくい子たちが、実物を見て共感を味わうことができた。
 - 犬が近寄ってくると自然に目が行き、手が出て、触り、呼び掛ける。子どもたちが自分の発意で行動している場面が何度もあった。
 - 時間的な見通しを持つことが難しい特性があっても、2回のセラピーを楽しみに普段の療育を過ごすことで、予定を認識する練習となった。
 - 障がい特性から比較的「経験」をしにくく、出来事に対して0か100(嫌いか好き)と固定しやすい子どもたちが、セラピー活動の場では、犬から示される好意や視線を受け、経験を受け入れていく様子が見られた。



ワンちゃんたちがやってくる!施設調モデルレポート(A A A的A A I) ドッグセラピー受け入れ側施設(やるまでのこと・やってからのこと)

しいのみ学園園長 高井敏雄氏にお話を伺いました。

受け入れにあたって

園には年間計画があります。そして「何かするのだったら、子どもにとって、とにかくプラスになるように」ということで、どうしたら子どもが喜ぶか、どの方法が一番良いかということ、初回の打ち合わせから職員は真剣に考えました。ワンちゃんも事前に学園まで来て職員と顔合わせをしたり、学園の普段の様子を見ていただくなど、入念に事前準備に時間を費やしました。



「最初の出会いをどうしようか」

いきなり広いホールで会うよりも、子どもたちが安心して生活している教室にワンちゃんたちが訪ねてきてくれたというスタイルを取ろうではないか、そして苦手な子は後ろのほうにいていいし、得意な子は前のほうから手を出してもいいし、そこからまずスタートして、そのあと、子どもたちはホールに集まって、全体でワンちゃんとお会いしようというスタイルにしました。こうすることで、ワンちゃんとの「出会い」が楽しいものとなりました。



「お任せでないのが学園にとってラッキー!」

この事業では、既存のプログラムをただ受け入れるのではなく、ハンドラーさんやコーディネーターさんたちと一緒に実施内容を考えることができる、一緒に意見を言うことができるのが良かったです。

「どうしたら子どもにいいだろう、どうしたらワンちゃんに伝わるだろう」と、それぞれの立場でお互いにしっかり話し合いながら進めていきました。

ワンちゃんたちへの期待を高めたり、あとから思い出せるようなたくさんグッズ、写真、ぬり絵、カレンダー、動画、パネル、缶バッジ、キーホルダーを提供していただき子どもたちが喜んでいました。



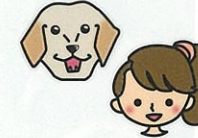
手作り
パネル



子どもたちはぬり絵をしながら、「ハッピーちゃん」、「みらいちゃん」と、名前を呼ぶようになりました。ワンちゃんの写真を拡大し、切り取ってパネルにして、学園に置いておくと、子どもたちが「みらいちゃん」と言ってパネルを抱っこしたり、給食の時に隣に座らせたりするような姿もありました。Zoomで子どもたちとワンちゃんとの出会いの場も設定しました。このワンちゃんたちが来てくれるんだよということを、子どもたちに伝えることで、早く会いたい、お名前はこんなだなど、子どもたちが親しみを持てるように工夫しました。

保護者への説明

保護者にも説明し、アレルギーなどの情報や写真の掲載について確認をさせていただきました。また、ワンヘルスの取組として、アニマルセラピーの目的を「しいのみだより」という通信や保護者の連絡会で説明しました。こうして、保護者が「子どものために来てくれる」ということで、お互いの気持ちが高まっていきました。



ベランダから登場するという方法

しいのみ学園には、教室と園庭の間にベランダ(廊下)があり、子どもたちのなじみの場所になっています。そこで今回は、いきなり教室内に犬が入ってくるのではなく、犬たちにこのベランダを通して登場してもらうことにしました。子どもたちはいつもの教室からベランダにいる犬たちを見て、安心して楽しい出会いのスタートが切れたと思います。最初から、犬の名前を呼んだり、自分からさわろうとする姿を見ることができました。

ホールでの活動 本物の犬と出会い

最初から、抵抗なくふれあう子どももいましたし、先生が事前に教えてくれたさわやかさを少しは出来る子もいました。子どもによっては、突然の動きもあるため、先生が子どもの後ろについてサポートしながら、ワンちゃんと関わろうとする気持ちや行動をしっかりとみてくれました。

フープジャンプ

ある女の子は、ハッピーちゃんのジャンプが成功したあと、自分のことのように喜んでとび跳ねていました。一緒にやったという気持ちの表れと感じました。



フープジャンプに
チャレンジ!

誕生会と記念写真

1回目の実施日が、偶然ハッピーちゃんのお誕生日でした。園もお誕生会が月に一度あるのですが、その時と同じ流れで誕生会をしました。最後に記念写真を撮って、ワンちゃんとお別れしました。



フェルトのお花のシールをくっつける

1回目が終わった後の話し合いで、直接触るのが少し苦手な子もいたので、フェルトのお花のシールをワンちゃんの服にくっつける活動を盛り込んでみては?というアイデアを、ハンドラーさんからいただきました。ワンちゃんには抜け毛を防ぐためのシャツを着てもらい、そこに子どもたちがフェルトのシールを貼りに行くという内容です。これなら抵抗が少ないだろうということで取り入れました。「ワンちゃんを可愛くしよう」という働きかけによりワンちゃんのそばに行こうとする気持ちになった子どももいました。子どもの経験を広げたいという先生の思いと、ハンドラーさんを通じてワンちゃんたちに協力してもらえ活動とを組み合わせることができた例だと思えます。



終わってからも・・・

子どもたちは当日の帰りの会だけでなく、後日、様々な場面でワンちゃんのことを話題にしていました。実際の活動時間は2回で合計2時間程度でしたが、日記にワンちゃんの絵を描いてくる子ども、パネルを抱っこして持ち歩く子どもなど様々な様

子が見られ、子どもたちの中にワンちゃんとの出会いが強く大きく印象に残ったと感じています。家庭でもワンちゃんの話をしているようで、保護者にも喜んでいただきました。



子どもたちの姿から思ったこと

子どもが先生から言われて行動するのではなく、びくびくしながらも、もう一度触ろうとしたり、自ら積極的に行動している姿が印象的でした。また、最初は触ることに消極的な子どもでも、「あの子が触ってるから、私もやってみよう」という気持ちになったり、「友達と一緒にだからこそ」積極的に行動できていたのではないかと思います。子どもたちの様子から「言葉を介さないコミュニケーションの素晴らしさ」「心と体が体験を通して開かれていくこと」を実感しています。「自ら動く心と体」、私たちが大切にしていることです。苦手なこと、あるいは、はじめてのことにも向かっていく、そういう心の広がりのようなものを感じました。



「子どもたちの心に、小さくて素敵な芽吹きがまたひとつ」

今回は、県の事業でしたが、子どもたちに単発でなく継続して経験させたいと考えて、学園の独自の事業として実施できないかと考えました。令和5年度は学園として、ドッグセラピーを年間3回、実施することにしました。学園だけでなく、同じ日の後半に、学園が設置している放課後デイの子どもたちにも実施していただきました。子どもたちはやはり、大喜びでした。3回というのが子どもたちにちょうど良く、今年の分という感じで、心に残っていくような気がしていますので、来年度以降も実施することとしています。



園長先生

※この記事は、令和5年9月16日 セラピー犬派遣事業「犬は友達」報告・意見交換会でのご発表をもとに編集しました。

「ワンちゃんたちがやってくる」

(聴覚特別支援学校、視覚特別支援学校でドッグセラピーを実施)

令和5年度のドッグセラピーは、福岡聴覚特別支援学校、久留米聴覚特別支援学校、福岡視覚特別支援学校の3校で実施しました。支援学校の先生方は障がい特性に応じた専門的知識をもって子どもたちに関わっています。犬たちの派遣側のハンドラストaffは、犬たちの行動を管理しつつ、本物の犬に触れる機会が子どもたちの喜びにつながるように全力を注いでいます。

どの学校も、犬たちの訪問は初めての機会ということで、子どもたちと犬たちとの出会いを楽しく豊かなものにしていくために、お互いの知識を出し合い、リスクに備え、プログラムを組み立てていく関係者間の相互理解のプロセスをととても大切にしました。



安全で安心な活動を支えるスタッフと、3頭のセラピー犬

STEP 事前の情報共有

1

(1)事前打合せ

- ① 参加動機の聞き取り
- ② 不安な点の聞き取りを行い、対応を検討 (例)アレルギーや犬への不安を持った子どもがいる など
- ③ 障がい特性に応じた配慮や工夫についての情報共有

(2)派遣団体からの教材提供

犬の紹介動画や、ぬり絵、カレンダーなど犬への興味がわくような教材が提供されました。

(3)学校での事前学習

教材を活用し、子どもたちの発達に応じた内容で事前学習が行われました。

(4)プログラム作成

日頃の子どもたちの様子を見学したり、犬たちの活動しやすさを確認しながら、コミュニケーションを図りつつ、当日のプログラムを作成していきました。

STEP 当日の活動

2

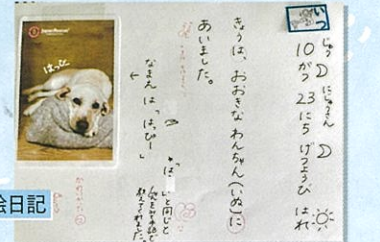
それぞれの学校と打ち合わせて作成したプログラムを実施しました。

STEP 事後の振り返り

3

実施後、参加した先生方と、派遣側のスタッフ、専門職のチーム、行政で、子どもたちの様子や印象に残ったシーンを話し合いました。活動の事後も、体験を言葉にしたり、表現する力を育む活動へと繋がりました。

- 聴覚特別支援学校の幼稚部 帰りの会の発表・「絵日記」(写真)
- 視覚特別支援学校の小学部 教室での感想・日記・作文



絵日記

犬は友だち・世界の広がり

令和5年度の学校でのドッグセラピーは、特性に応じた配慮をしつつ、子どもたちと犬たちとのより良い関係を生み出す実践的な取組となりました。関わってみようとする意欲の表れ方には多くのバリエーションがあり、犬たちの優しく親和的な態度によって不安が軽くなった子どももいました。また、もっとたくさん関わりたいと名残を惜しむ姿もありました。今後、犬たちとの活動がそれぞれの子どもたちの心にどんな種を蒔いたのか、長い目で見守っていくことが大切です。

福岡聴覚特別支援学校幼稚部

(令和5年10月23日(年少6名、年中8名、年長6名))プレイルーム
コーディネーター(専門職チーム 医師、OT、ST、保育士、心理士)、行政

STEP 事前の情報共有

1

- 実体験を通じて、毛がフサフサしている、とか「あたたかい」「あたたかみ」のような体験を通じた「ことばの学習」にも繋がる。
- 子ども達はふれあいや遊びが好き。動物とのふれあいは日常的にはあまりない。生き物とのふれあいは好んで行う子ども達なので、交流の幅を広げたい。
- 聴覚に配慮した伝え方として、絵カードなど視覚の手がかりや手話があった方が伝わり易い。

アレルギー対応
(1名)

- かかりつけの医師と相談。配慮点などチームの内科医の先生からの助言を共有し参加できた。参加による症状なし。

STEP 当日の活動

2



大きいワンちゃんとのふれあい

「先生、犬がいるよ」
「みらいちゃん、ちっちゃいね」

「ワンちゃんが帰っていく... また会いたいな、元気でね」

犬の姿を見て喜び、その体験を先生と共有する場面。

小さな胸の中にたくさんの想いを抱える子どもたちが自然と集った、余韻に包まれた見送りの場面。

STEP 事後の振り返り

3

- 犬とのふれあいの経験によって、数の概念や〇匹という数え方を獲得でき、ことばへの繋がりが生まれた。
- 事前に犬たちが載ったカレンダーやぬり絵、動画などが用意されたお陰で、事前学習を行うことができ、当日を楽しみに待つことができた。
- 大中小と大きさの違う犬が3頭いた。実際の生き物とのふれあいから、その「大きさ」「迫力」「温かさ」「感触」「鳴き声」「動き」などを直に感じる事ができた。
- 自分から犬に関わりたい、話したいという子どもの姿を見ることができた。
- 図書館に行って犬の本を探す姿があった。
- 翌日、絵日記はほぼ全員、犬のことを描いてくれた。

年少：犬の耳と自分の耳を比べて犬にも耳がある！フワフワだ！など新しい発見をしていた。

年中：犬に興味があるけれど近づけない、でも近づきたいと葛藤している子どももいて、犬を触りたくてたまらない気持ちが溢れていた。

年長：いつも受け身な幼児が自分から手を伸ばして撫でていた。教室に帰ってからも「犬いた」「大きい」「可愛い」など興奮気味に話していた。

久留米聴覚特別支援学校幼稚部

(令和5年11月6日 年少4名、年中4名、年長8名)プレイルーム
コーディネーター(専門職チーム 医師、OT、ST、保育士、心理士)、行政

STEP 事前の情報共有

1

自分以外のあたたかい生き物にふれること。生命を感じる。本物にふれること。実体験を大事にしたい。ワンちゃんはこんなことを喜ぶんだな、こんなこと嫌なんだな、相手にも意志があることへの気づきの機会になることを期待。

アレルギー対応
(こども1名、職員1名)

- 医療的ケア児(気管切開)1名がアレルギーもある。その子は活動範囲が広がってきている。学校の看護師さんが同席して対応。今の時期は犬の毛が、やや抜けやすい。毛が入らないようにする。(カニューレのタイプ、活動の内容や状況を見て距離をとるなど配慮して参加。)

STEP 当日の活動

2



朝の会

温かい体にふれながら...

なぜか、フープをくぐらずに駆け抜けたハッピー。かわいい!面白い!楽しい思い出に。

STEP 事後の振り返り

3

- 心がワクワクするような活動であったため、普段なかなか集中できない子どもも集中して体験活動に参加できていた。
- 実施前から、多くの子がセラピー犬の名前を憶えてすごく楽しみにしていた。さわりたいけど怖いと思っていた子どもも最終的には自分から積極的にふれることができた。
- 犬が受け入れてくれるので物理的にも気持ち的にもガードが下がる。引っ込み思案の子どもも初めから触れることができていた。犬がかわいいので、気持ちが固くならずにいられた。
- 帰りの会の意見もよく出ていた。生き物にふれる機会がないので外部から来てくれて、ふれあえることが嬉しい。
- セラピー犬にも喜んでほしいという気持ちを持っていた。抱きつきたいという気持ちを我慢している様子が見えた。知らない人に抱きつかれたら怖いだろうと想像し、行動を考える子どももいた。
- 犬が喜ぶと自分も嬉しい、しっぽをずっと振っていたので喜んでいたということを事後に話していた。早速ぬり絵を渡しに行きたいと話していた。手紙にして送ろうと思う。
- 自分の行動を犬のために抑えることができていた。満足して落ち着いて過ごすことができていた。犬を喜ばせたから次は人を喜ばせたいという気持ちに繋がっていきたい。
- 動物を玩具みたいに思っていたところもあるが、動いて喜んで、毛も抜けるし、お腹も動いていて、生きているということを感じられた。犬にも気持ちがあるという本物の体験のなかで、色々繋がるシーンがあった。お腹が動いていること、ひげが生えていること、耳が柔らかいこと、自分と同じだと話していたので、次のプログラム作成に繋がりたい。
- 人には厳しくても犬には優しい様子があった。どんな行動が優しくどんな行動が困らせるのか、どうやったら人との関わりに反映させることができるか指導していきたい。犬との関係で抱いたような喜ばせることの楽しみを人との関わりに反映させるのが私の役割。「私がなでたら喜んでいた」など、喜ばせることを一緒に喜ぶ楽しさ。「私が触ると喜んでいて」のような表現が素直に出せてよかった。
- 帰りの会で感じたことを発表させると、ずっと手が拳がった。フープをハッピーがくぐった、なぜくぐったのか、皆が笑ったからか?ハッピーはどう思ったんだろう、伏せていたが疲れたんじゃないか、そんなことが話題になった。
- 子どもたちの感想も、ハッピーの行動を思い込みのないストレートな表現で出せていた。
- 初めての経験だったが、人と人では学べないことが経験できた。受け入れてもらえるということの満足感、どんな自分でも受け入れてもらえるいい経験になったと思う。

STEP 1 事前の情報共有

1

- 普段、動物にふれあう機会が少ないため、犬とのふれあいは子どもたちが喜ぶだろう。盲導犬とのふれあいは以前はしていたが、コロナ後はしていない。喜ぶ体験は言葉にもつながるだろう。
- 子どもたちは普段からタブレット操作にとっても慣れていて、場面を撮り、手で拡大して様子を視聴することができる。一人に教師1名がつくので、進行していることは言葉で解説してあげられる。
- たくさんの活動というより、「じっくり」と時間をかけて行う方がいい。「どんなふうにさわるといいよ。」などを伝えてほしい。ワンちゃんの様子(うれしそう、尾を振っている)など伝えたい。キャッチボールは、ボールに鈴など音が出る方がいい。
- 事前見学の際に、子どもから「いきなり飛びついたり吠えたりしませんか?」という不安を伝える質問があり、ハンドラーから直接セラピー犬たちは吠えないように練習していることも伝えた。(ただし犬は吠える生き物なので絶対吠えないということではないことも伝達)。

アレルギー対応
(1名)

- 距離の配慮(3メートルくらい離れて参加)、養護教諭、担任が同席。

STEP 2 当日の活動

2

3頭タイプの違う犬が来てくれて、犬というひとつのくりではなく、それぞれ違うということが分かってよかった。大きさと触り心地の違いを感じられた。



小さいワンちゃん

中くらいのワンちゃん

大きいワンちゃん

STEP 3 事後の振り返り

3

- 怖いと言っていたが、自分から触りに行っていた。犬がどんなふうに出てくるかわからずに言っていただけでもいい。動画で見ている期待していたが、わーっと出てきたのに驚いたのかもしれない。
- 犬に触れて鼻が湿っているのを感じ、「どうして濡れたんですか?舐められたんですか?」と質問していた。事前に犬の動画を送ってもらっていたのは良かった。
- 次の動物とのふれあいでも、やってみようというところに繋がるといいなと思う。子どもたちがさわりたいと思っているのに、ケンタくんは頭を触らせないような動きをしたので、子どもたちはその動きを面白がっていた。仕事を真似る子もいた。
- みらいちゃんの毛をさわること、柔らかくてぬいぐるみみたいだったという感想があった。実施前はハッピー推しだったが、実際にはみらいちゃんが可愛いと言っていた。
- 学習の中で「犬は尻尾を振るもの」という文章を読む機会があったが、勢いよく尻尾を振るということを実際に見られて良かった。これから話を広げていきやすいと感じた。犬とふれあう経験はとてもありがたかった。
- コミュニケーションの取り方、さわりの導入もあって良かった。これから興味が湧いたらいいなと思う。
- 実際にふれると温かい、動く、ブンブン尻尾を振って風が来るということや、毛並みを感じてもらえてよかった。怖くなると固まる子どもが、ふれることができてよかった。「おやつやりは無理でした」と言っていたが、表情は柔らかく楽しかった様子。
- 嫌な時には手をグーッと握る子だがその姿が全くなく、先生と一緒に撫でることができていた。
- 挨拶の仕方や人より犬は耳がいいということなど新しい気づきももらった。

犬が近づいてくるのではなく子どもたちが犬に近づいていくというやり方は、とてもよかったです。より能動的に犬に関わることができたと思います。わりと時間があつたので、全員がキャッチボール、おやつやりができたのもよかったです。スタッフの方々にコロコロ等きめ細かに対応していただいたので、アレルギーの件も無事にクリアできていたと思います。大きな犬に直接触れるような機会は、これまでどの子もなかったでしょうから、たいへん貴重な経験ができたのではないかと思います。ありがとうございました。



担任の先生からのお手紙

ワンヘルスの森四王寺でのドッグセラピー 野外モデル 森林公園でセラピー犬と子どもが会い交流する活動

「ワンヘルスの森 四王寺」は、大野城市、太宰府市、糟屋郡宇美町にまたがる四王寺山に位置します。この森林公園は、訪れる人たちが気持ちよく楽しめるように季節の変化に応じて、エリアごとに手入れがされています。遊歩道があり、自然観察、歴史探訪のほか、健康づくりや、心身の健康維持・増進に効果があるといわれている森林浴を楽しむことができます。セラピー犬施設等派遣事業では、こうした森林公園でのドッグセラピーの効果を見出すために、野外モデルを実施しました(7セッション、参加延べ人数8名)。

野外で行うことのメリット

自然の美しさや環境音によって犬と参加者がリラックスし、ストレスの軽減や心身の調和につながる。

清浄な空気、新しい匂い、音、景色など刺激が豊富であるため、犬たちが活気づき、参加者も活力を得る。



子どもも犬もシャボン玉を遊ぶ

静かで開放的な環境の中にあることで、人と犬のコミュニケーションや協力関係が促進される。

散歩やキャッチボール、フープジャンプ、シャボン玉などの活動をのびのびと行うことができる。

緑の中でのびのびジャンプ!



注意点と対策

- 天候により、プログラムが中止されるリスクがある。
 - 転倒やケガのリスクが高まる可能性がある。
 - 野生動物との遭遇、虫刺されや花粉アレルギーなどの可能性がある。
- ▶ 計画に柔軟性を持たせる。
 ▶ 救急の対応を学んでおく。
 ▶ 服装や携帯品など予防に努める。

コーディネートのポイント — 配慮点 —

1. 参加者が新しい場所・新しい活動に困難さを持つ場合、「森に出かけてワンちゃんと仲良くなるよ」という誘いが、本人の参加へのモチベーションにつながるかどうか見極めるとともに伝え方も工夫する。
2. 室内の方が落ち着くという人もいる。「野外はみんな気持ちいいはず」という思い込みから計画しないように気を付ける。

参加する子どもたちは、療育や相談に関わる支援者からの推薦という形をとりました。

- 森で犬と出会うことで、子どもが生活していく場所や経験の広がりにつながる。
- 一緒に遊べる犬が待っているということが、森などの自然環境の場に出かけるきっかけとなる。
- セラピー犬と子どもが森で出会い、ゆっくり仲良くなる体験をする。

STEP 1 準備

1

- 活動の場所や散歩コースの検討、犬の環境への適応の確認
- 参加動機、ニーズの聞き取り
- 日時、活動内容の連絡(支援者を通じて家族や子どもに事前に伝達)
- プログラム調整

STEP 2 当日の基本的な流れ(参加者によって工夫)

2

ラポート※(慣れる、距離を縮める活動、名札をつける、ふれる) → 活発な活動(フープジャンプ等) → 散歩 → お世話(お水、おやつ) → 一緒に遊ぶ(シャボン玉等) → 記念撮影

STEP 3 振り返り

3

散歩コース下見

犬は、魚や鳥がいても大丈夫そうだね

本番での散歩

ゆっくり歩こうね



「森で、優しいワンちゃんが待っているよ」「ワンちゃんと森でゆっくり仲良くなろう。」

というメッセージが届いた子どもたちがワンヘルスの森に会いに来てくれました。その中で、未知の活動への参加に一步踏み出した小学4年生のAさんと犬たちの関係の深まりについてレポートします。



〓 アニマルセラピーに期待される効果 〓
安心感 / コミュニケーション / モチベーション / エンパワメント / 気分転換

Aさん

- 見通しを持って行動することが苦手。
- 感覚的に過敏で、苦手な音があり、さわられるものが少ないため、体験の機会が限られている。
- 他者に気持ちを伝えることが苦手で、受け止めてくれる存在がとても重要。
- 登校の困難さがあり、放課後デイサービスの支援を受けている。
→ 安心して活動するための環境づくりなどの配慮が必要

1回目

(2022年9月下旬 場所:ワンヘルスの森四王寺 管理事務所前駐車場付近)

STEP 1 (事前の情報共有) 活動に対する期待

1

支援者のコメント

- Aさんは周囲の意図を敏感に感じ、それが行動の制約となっているように見受けられる。大人の意図に縛られず、自由に表現できる場があれば…。
- ふわふわした手触りのものが好き、静かな公園も好きなように思う。
- Aさんが犬にさわりたいと感じたり、こわいと思ったりする気持ちを自分で表現できる機会になるのでは。

お母さんのコメント

- 家からなかなか出たがらないが、様々な経験をさせたい。
- 犬にふれる機会が少なく、さわり方も分からないが、訓練された穏やかなワンちゃんなら安心できる。
- 声をかけてくれた先生を信頼しているので活動に参加することを決めた。

Aさん本人の様子 ▶ 事前に送った犬の写真を見ていることがあった。

STEP 2

2

当日 10時予定 → (到着12時~12時40分)
出会い(みらい)(ハッピー) → ふれあい(主にハッピー) → おやつ(ケンタ) → お別れ挨拶



STEP 3

3

振り返り

2時間遅れの到着でしたが、初めてのセラピー犬との出会いで、指先でちょっとさわっては遠ざかることを繰り返し、次第に自分から「距離」を縮める等、さわりたいという気持ち、さわられた嬉しさなどが表情に表れていました。みらい、ハッピー、ケンタのそれぞれと接した中では、ハッピーへの関心が高かったように見えたので、2回目はハッピーとの活動を計画しました。

・・・一年後のお母さんへの聞き取りから・・・

初回は、子どもが、まだハッピーちゃんたちに会ったことがなく、情報が少なかったので、出かけるときに、どうやって伝えたらいいか難しさもありました。当日は、行く行かないというやりとりが続き、約束の時間に間に合いそうにないと思い、もう無理かな、とも正直思いましたが、先生からの電話で、「到着まで待ってますよ」と言われ、すごく嬉しかったです。私自身、「行きたい」「行こう」と言う気持ちが強くなりました。時間的に余裕を感じることができ、とにかく行こうと思って運転したことを一年たった今でも覚えています。

2回目

(2022年10月中旬 場所:ワンヘルスの森四王寺 焼米ケ原)

STEP 準備

1

初回での子どもの様子を踏まえて、プログラム調整。散歩コースの下見。



STEP 当日

2

定刻に到着 11時~12時
出会い(名札) → 散歩 → お世話(水、ブラッシング、おやつ) → 写真 → お別れ挨拶



STEP 振り返り(友だちのはじまり)

3

前回の活動が楽しいものとなり、今回は定刻の到着。2回目のAさんは、散歩も体験することができ、ハッピーへのふれ方が明らかに変化しました。Aさんからさわようになり、しかも指先で瞬間的にさわるのではなく、手のひらをしっかり押し当てるようになりました。手のひらから伝わる温かさを通じて、犬とコミュニケーションをしているように見受けられました。ハッピーが自分を受け入れてくれることで、自分からも受け入れたい「友達の始まり」の出会いになったと思われます。

お母さんより

早速、ハッピーの缶バッチをデイバックにつけました。はずれたらつけてほしくて持ってきています。



・・・一年後のお母さんへの聞き取りから・・・

正直、こんなに楽しむとは思いませんでした。この日、帰ってからとてもご機嫌でした。ハッピーに名札をかけて喜ぶ。往路は、リードは持たないが嬉しそうに歩き、復路では、何度か落とすことはあってもリードをしっかり握って歩いていました。ハッピーが時々、様子を見てくれていました。ハッピーをさわりたい腕まくりをしたのには、本当に驚きました。

3回目

(2023年10月下旬 場所:ワンヘルスの森四王寺 こどもの国)

STEP 1

約1年ぶりの再会

お母さんに活動を案内し、Aさんに伝えて参加の準備をしていただく。

STEP 2

当日 出合い(名札) → 散歩 → ふれあい、おやつ(こどもの国) → お世話(駐車場側) → 写真 → お別れ挨拶



ハッピーの体にリラックスしてふれる

おやつをあげる

ハッピーにおやつをあげた直後、右手でハッピーの頭を撫でようとする(正面)

STEP 3

振り返り

森林公園でのハッピーとの交流を通じて、Aさんの行動がポジティブな変化をしていく過程を見ることができました。

野外モデルの可能性 — 3回の実施を通じた行動の変化 —

モチベーションの変化	犬へのふれ方の変化	セラピー犬の姿勢の変化
1回目 2時間の遅刻 本人にとって見通しが立たない活動だったため	初回 指先だけ、瞬間的にふれてすぐ駆け出す。	初回・2回目 主に背中を向けた姿勢が多い。
2回目 定刻到着 「楽しみ」の体験と認識したため	2回目 手のひらでじっくりふれる。両手を当てる。	3回目 子どもと犬が正面に向き合う回数が増える。子どもが犬の頭を撫でようとする。
3回目 定刻到着 1年ぶりの再会を楽しみにしていたため	3回目 手のひら、手の甲でふれて喜ぶ。積極的にさわろうとする。	

デイサービスの先生に、ニコニコしながら何度もハッピーちゃんのキーホルダーを指差し、何か伝えていたそうです。デイの先生「楽しかった、嬉しかったと伝えたかったようで、こちらまで嬉しくなりました」。このエピソードから、Aさんにとって、ハッピーとの活動が楽しいもので、人にも伝えたいという気持ちにつながったことが分かります。

アニマルセラピーと森林浴の融合

自然環境のもとで行うアニマルセラピーは、子どもたちの社会的スキルと様々な刺激や感覚をうまく処理する力の向上につながる取り組みといえます。発達障がいがある子どもは、外界からの刺激に対する過敏さや鈍感さなど感覚的な特性を持っているために、行動範囲が狭くなる場合があります。一人一人さまざまですが、あまり外に出たがらないAさんにとって、今回の野外モデルは、ハッピーに会うために森に出かけるという行動へとつながりました。ハッピーの缶バッチやキーホルダーを大切にしていることから、Aさんはハッピーの存在を身近に感じ続けているようです。子どもとセラピー犬たちの楽しく穏やかな関わり様子は、それを見守る大人たちに、コミュニケーションのあり方や環境との関わりを見直す機会を与えてくれます。アニマルセラピーと森林浴の融合をテーマとしたプログラムを検証、実践しつつ、理解や協力の輪を広げていくことが大切です。

多職種チーム

本事業では、行政と連携しながら、医師、獣医師、臨床心理士、作業療法士、言語聴覚士、保育士などの多様な職種が、ドッグセラピーの実践に関わり、ワンヘルスの取り組みとしてのドッグセラピーの効果、安全面に配慮した普及方法、持続可能な仕組みについての検討を行っています。

福岡県でのモデルケースに関して、「事前の準備」、「当日の立会観察」、「事後の考察」を通じて、安全な導入と実施を行うためのノウハウや、プログラムのデザイン、メニューの選択など、多くの着眼点が蓄積されました。

「専門職の役割 瞬間を受け取る感性を磨くこと」

内科医 大久保 史子

アニマルセラピーの効果については様々な研究で実証されています。これらの理論に支えられて行動するのは専門職の役割です。ただ、アニマルセラピー=〇〇効果という公式で誤解されないようにと願っています。

もちろんアニマルセラピーの普及には効果の提示が大きな意味を持ちます。だからこそ、なおさら、私たちが、どういった変化を効果と捉え、価値を見出すのかについては、慎重に丁寧に議論を重ねていく必要があると考えています。

この事業に関わる人と共に深めていきたい表現があります。『動物介在活動においては、各分野の専門家が数か月、数年間かけても達しない子供の心の間にさえ、瞬時に動物とのふれあいが響く感動的な瞬間がある』(吉田尚子著「アニマルセラピーの現状と応用」*)という箇所です。感動的な瞬間とは、あらかじめ用意された効果の枠の中にとらわれない別次元でのことだろうと考えます。

子どもの内面にある願い、こうしたいと思うことを選び取る力、その発現は、突然のように起こる場合もあれば、長い時間かけてゆっくりと起こる場合もあるでしょう。それに気づくためには、私たちが受け取る感性を磨くことが大事です。

「相手をおもんばかること」、「対話をする」、「時間をかけてみる」、「待つこと」、こういった子どもたちに向き合う姿勢を大人が主体的に考え直す、このことがアニマルセラピーの持続的な効果につながるのではないのでしょうか。専門職が関与することで、こうしたことをうまくコーディネートしていければ良いと思います。

*小児保健研究 第74巻 第3号, 2015(361-365)



「コーディネーターの役割」

NPO法人ことり

福岡での活動は、セラピー犬派遣団体のハンドラーさんと一緒に行動して、受け入れ先や、専門家の多職種チームとの関係づくりを行いました。初回時には、行政の方が挨拶に同行し、施設や学校側に事業の趣旨を伝えてくださることで、ドッグセラピー導入時の連携がとりやすくなりました。各地域で普及していくためには、社会的信頼のある行政や公的団体の理解や支援が重要だと感じています。専門職のチームとハンドラーさんたちの間を繋ぐことにも、やりがいを感じました。チームの皆さんは、ケースカンファレンスなどでチームアプローチに慣れている方々ばかりでしたが、ハンドラーさんと対話する機会を設けたところ、いい意味で、専門的な解釈や、障がいの捉え方などの解説に手厚さが加わり、相互理解が深まったように思います。

ドッグセラピーは犬の力を借りながら行うものですが、「犬によって人だけが健康を取り戻す」ということではなく、「犬にとっても人にとっても健康につながる」活動にすることが大切です。犬の気持ちの汲み取り方、疲れやストレスのサインなどは、ハンドラーさんたちに大いに、助けられ、教えられています。

いろいろな立場の人が話し合いをする会議は、やや緊張した雰囲気もありますが、そこに「セラピー犬」たちが入ってくると、急に和んだり、打ち解けあったりするシーンが何度もありました。

人々の関係を前進させてくれるセラピー犬の「場の調整力」から、コーディネートの基本を学ばせていただいています。



本番前の打ち合わせ

それぞれの窓・それぞれの気づき

それぞれの専門性を背景に、ドッグセラピーに立ち会ってくださった専門家チームの方々に、想いを語っていただきました。



REPORT
公認心理師
臨床心理士

「ドッグセラピー」での出会いを学ぶ
公認心理師・臨床心理士 利光 恵

ドッグセラピーの見学から、特に深い学びになったことは「**犬と子どもを繋ぐハンドラーの感性**」という点です。訓練されたセラピー犬たちは、人からの期待や信頼を受け取ることができるように調整されています。しかし子どもが犬を怖がっている場合、もしくは犬の許容範囲を超えるような過剰期待を持って関わってくる場合も、セラピーの場では当然起こります。その際犬は、ハンドラーを見たりそっと身体を寄せます。ハンドラーも、子どもと犬の間で生じる緊張感をいち早く察知して、リードで両者の距離の調整を図ります。子どもが悪い、犬が悪い、そういった経験にならないように、両者が『安全』『安心』の中で出会えるように、緊張を緩和する役割をハンドラーは担っていると感じています。

犬に会えるという場面は、参加者の気持ちを高揚させます。それが過度になると空気が『緊張』に変わってしまいます。一時の緊張は、人にも犬にもポジティブな刺激になりますが、ある一定時間を超えた緊張状態は、『不安』を生み出します。『緊張』も『不安』も、成長・発達には適度に必要ですが、強度や持続性によっては、心に大きな傷を及ぼすものと、心理学では考えられます。そこをハンドラーは、リードで犬と人へのダメージを極力ないように場を構築しているのです。

ドッグセラピーでの出会いに見られる、(まずは緊張・不安をお互いに最小限にするために刺激を減らす)、(それぞれのタイミングで距離を保てるように互いの力を信じて待つ)といった支援は、いわば『**引き算の支援**』といえます。こうした支援は、障がいのある子どもや大人だけでなく、人と人との出会い、自然と人との共存、**全ての出会いに最も大切なことだと、自戒の念を込めて思い出させていただきました。**



REPORT
保育士

「犬と遊ぼう」
保育士 渡邊 裕子

通園施設でのドッグセラピーは、犬のパネルやオンラインでの紹介をする事前学習によって子どもたちの『**会いたい**』という願いや期待へと繋げながら、当日を迎えました。いよいよ本物の犬がやってきて、生きている犬の動きを身体で感じた子どもたちは、一緒に遊べる嬉しさに溢れ、何回も犬に声かけたり、犬のしぐさに指をさし、それを先生に伝えたりしていました。興味が高まったからこそ、犬に近づいてみたいけれども近づけない子どももいました。その子は、やがて指先で、次は手のひらでふれていました。犬の温もりを手のひらで感じる喜びを身体で表現している姿に、**観ている側も嬉しくなりました。**

また別のある子どもは、活動の見通しが持てないのか戸惑っていました。先生にしがみつ、先生を支えにしながら、友だちが犬と関わっている様子を見ていました。そのうちに先生と一緒に犬のそばへ行き、**遊び合うこと**が出来たその子は、顔いっぱい喜びを表していました。さらに遊び合えたことを先生と一緒に喜んでくれることへの**二重の嬉しさ**が観て取れました。

ハンドラーと受け入れスタッフの皆さんとの間の綿密な打ち合わせは、こうした柔らかな時間が流れる場を実現するのに大きな意味があると思います。

人と犬の関係、人と人との関係、生き物同士の関係が徐々に広がっていくのは素敵なことです。子どもは自分の気持ちをわかってもらえる体験をし、先生や友達と一緒に**犬を通して楽しみながら、世界を広げている**ようでした。ドッグセラピーが終わってからも子どもたちの心には余韻が残っていました。子どもが犬と遊び合った楽しい経験は、**これからも誰かと分かち合いたい想いに繋がっていくのだらう**と思います。



REPORT
作業療法士

ドッグセラピーについて (OTの眼差し)
作業療法士 竹中 祐二

ペットを飼うことや動物とふれあうことというのは、人々にとって大事な作業と考えられます。私は作業療法士(OT)ですから、何らかの機能的制限や社会的制約があってペットを飼ったりふれあったりすることが困難な人たちのために、**その環境を取り戻したり実現したりするための知恵を絞る**という視点からこの事業に参加しています。OTの視点では、人の日常生活は全てが作業です。周囲から期待されることを十分にできなかったり、本人がしたくてもうまくいかない場合に、対象児・者またはその環境に対してアプローチをします。

身近自立にかかわる事柄に比べると動物のふれあいは軽く見られるかもしれませんが、人間以外の命との関わり、それに対してどう対応をしていけばいいか、私たち支援者も学習していかなければならないと思います。

子どもたちの場合、短命な生き物の世話をすること、遊ぶこと、やがて看取る、そういう経験が、自分以外の命について**学ぶ命の学習の機会**としてあります。例えば犬の世話が、やりたい活動、やってみたい活動であれば、そういう対象に作業療法を適応できればと思います。

これは人の運動機能の促進だけでなく、心理・社会的には相手に対する思いに気付く体験場面になります。発達障がいのお子さんにとっても、特に大きな拒否を示さないワンちゃんとのふれあいを通じて、雑なタッチでさわられると嫌、突然のタイミングでさわられると嫌といったことも、少しずつ気づき、距離感や関わり方を学んでいく機会となります。うまくいったり、いかなかったり**と行ったり来たりしながら体験する場面を作る**ことが大切だと思います。



REPORT
言語聴覚士

「ドッグセラピーからの学び」
言語聴覚士 大取 望美

ドッグセラピーに立ち会い、特に印象深く感じた点を2点、述べたいと思います。

1つ目は**ハンドラーの犬を尊ぶ関わり**です。セラピー犬は、多くの訓練を受け穏やかでとても賢い犬です。ハンドラーは、責任を持ってセラピー犬の行動を管理しつつも、犬を道具(物)のように扱うのではなく、コミュニケーションの相手として尊重し、犬からの様々なサインを受けとり丁寧に返すことを繰り返していました。ハンドラーとセラピー犬の言葉に頼らない関係性は赤ちゃんとのコミュニケーションとも共通します。赤ちゃんの「泣く」という行動は、周りの大人による意味づけが繰り返されます。そのやり取りを通じて、赤ちゃんは次第に、はっきりとした期待を持つようになり、視線や発声、表情や身振り、指差しなどを意図的に発信できるようになっていきます。セラピー犬とハンドラーとの信頼関係にも、このような丁寧な関わりがあると感じました。

2つ目は、**セラピー犬の立ち居振る舞い**です。私はこれまで子どもたちと関わる際、どうやったら笑顔になってもらえるか、懸命に考えながら過ごしてきたように思います。それでもなかなか自分の思い描くようにはいかず悩むこともありましたが、ところがセラピー犬は、いとも簡単に子どもだけでなく大人までも、その場に居合わせた人たちを一瞬にして笑顔にしていました。セラピー犬は、ただそこに立ち現れ、座り、歩くだけで、人々を和ませその場を一体化させていきました。相手を変えようといった思惑が存在しないからこそ、共にいる人々の心と体が、ときほぐされていくように感じました。素晴らしい学びを得たことに感謝しています。



犬と人とのより良い関係を目指して

獣医師から

動物由来の
感染症について



多くの感染症は、動物由来です。狂犬病はその代表的なものの一つです。狂犬病は、ウイルスによって引き起こされ、感染した動物から人にも感染します。世界中で見られる病気で、かつては日本でも狂犬病が蔓延していました。現在、日本は狂犬病がない数少ない国の一つとなっています。

1950年に狂犬病予防法の施行により、犬の登録、狂犬病予防注射、野犬の管理が徹底されたことで、1957年には、日本国内の狂犬病は撲滅に至りました。

日本で、狂犬病への感染を恐れる事なく、犬にふれることができるようになったのは、こうした経緯があります。ペットとのふれあいを楽しむ事ができる状況を今後も続けていくためにも、飼い犬への狂犬病予防接種はとても重要です。

狂犬病以外にも、犬から人に感染する病気があります。犬にさわったら手を洗い、犬に口移しで食べ物をあげないなど、感染症を防ぐ行動をするようにしましょう。

犬と仲良くなるために

ドッグセラピーの実施を通じて、子どもたちと犬とがふれあう機会の価値を実感されている方々が多くなっていくと思います。子どもたちと犬とのより良い関係を築き、続けていくためには、犬への接し方について教えていくことが大切です。この手紙はそのような思いを込めたものです。子どもの発達や理解に応じて、こうした話題を子どもたちに伝えて下さい。

犬は友だち



ワンちゃんを好きになってくれたあなたへ



セラピー犬は、ふれあいを喜んでくれます。人と仲良くして遊んだりするのも大好きです。

ところが、どんな犬でも、さわっても嫌がらないというわけではありません。さまざまな理由から、人を噛んでしまう犬もいます。このことも、知っておいてください。

ずっとずっと大昔から犬と人は友だちです。セラピー犬と仲良く遊べたように、ルールを知って守ることで、いろんな犬とも仲良くなれるはずですよ。きっとあなたなら、仲良くなる方法を見つけてくれると思います。



ハンドラーから

犬と
仲良くなるための
工夫



私たちがセラピー犬と訪問に行く時には、どんなふうに犬と仲良くなったらいいか、参加する方々に伝えるようにしています。福岡モデルのドッグセラピーでは、さまざまな障がいについての配慮が必要とお聞きしましたが、それぞれの受け入れ先の先生方に、伝達を協力していただき、とても助かりました。

写真は、ポスターを作って理解を呼びかけた時のものですが、聴覚特別支援学校では、この内容をわかりやすい絵カードにして事前学習をしてくださっていました。プログラムの導入で先生に子どもたちの前で、犬と仲良くなるためのルールについて実演していただいたのも良かったです。



ドッグセラピーへの理解と応援の輪が広がり始めています。
セラピー犬やハンドラーの数が増える社会的仕組みも普及のための大きな課題です。



ワンちゃんたちへ。ありがとう！これからもよろしく！



発行：福岡県福祉労働部障がい福祉課
TEL / 092-643-3264 FAX / 092-643-3304

委託先：公益社団法人 福岡県獣医師会
協力：認定NPO法人 日本レスキュー協会
NPO法人 ことばとリレーションシップの会(ことり)